

中世絵物語における画中詞の表現と機能（要約）

本論は中世に「発明」された画中詞というメディアについて分析し、その表現機能を明らかにすることを通して、中世の物語において生じた表現の革新の諸相に迫ることを目的とする。

画中詞とは文字通り画中に書き込まれた詞（テキスト）を指すものである。しかし画中に書き込まれたテキストのすべてを画中詞と呼ぶわけではない。絵を伴う物語作品において、画中に書き込まれた、物語の本筋を語るテキスト（これを本論では「詞(ことば)」とする）とは異なるテキスト、具体的には場面説明や登場人物の台詞や名前などを指して画中詞と呼ぶ。絵巻、絵本（本論では総称して「絵物語」とする）は、絵と詞という二つの異なる性質を持つメディアによって構成されているが、そこに画中詞という第三のメディアが加わることによって、複雑で多面的な物語表現が可能になった。

本論では、画中詞という実態のないものを多面的に捉えていくために第一部と第二部に分けた。第一部では画中詞総論として、画中詞の研究史および画中詞作品の文学史を通観し、メディアとしての画中詞の意義を論じた。第二部では画中詞各論として、画中詞が物語表現の中でどのように機能し、何を表現したかを、画中詞を持つ作品の分析から具体的に明らかにした。

第一部第一章は画中詞の研究史をまとめた。画中詞というテクニカルタームは従来慣習的に用いられていた「絵解」「絵詞」に代わるものとして新しく作られた用語である。絵の中に書き込まれた画中詞は文学研究からはあまり顧みられてこなかったが、絵解きとの関わりや、口語資料としての側面から関心が持たれるようになった。また、画中詞は文学だけでなく、語学、美術の分野においても研究対象となりうるものであり、画中詞はテキストでありながらもそれだけには留まらないという特殊性が表れている。

第二章では画中詞の文学史をまとめた。画中詞は十三世紀の説話絵巻の中で用いられるようになるが、絵の中に文字を書き込むという行為自体はそれ以前からも行われていた。その萌芽は絵解きに用いられた絵伝や、屏風歌、葦手などの文化の中に存在した。画中詞は、一人が物語を音読し、それを皆で聞いて楽しむという伝統的な物語享受の有り方から生まれたものと考えられる。初期の画中詞は「～のところ」という場面説明を目的としたものが多かったが、やがて登場人物の会話を表すものが多くなり、十五世紀に作られた『福富草紙』のように絵と台詞型の画中詞のみで構成された物語も登場する。最も画中詞を持つ物語作品が作られたのは十五世紀から十六世紀にかけてであるが、この時期は天皇やその周辺における絵巻の制作活動も盛んであった。特に十五世紀後半は小絵という通常の絵巻の半分以下の大きさの絵巻が流行する。この小絵という形態と画中詞は相性が良い。通常の大きさの絵巻では、画面の奥行きは縦方向にとられる。ところが小絵の場合は横方向に向かう。その結果、長文の画中詞であっても書き込むことが可能になるのである。画中詞作品の多くが小絵であるのもそのためと考えられる。ところが十七世紀の半ばあたりから画中詞は姿を

消していく。その背景には、印刷技術の普及と出版文化の台頭が考えられる。物語の制作と享受の環境がまったく異なるものになっていったのである。書写によって作られる絵巻・絵本の中から画中詞は消えていくが、版本では絵の中に場面の説明や登場人物の台詞を表すテキストが書き込まれるものが見られる。従来の画中詞とまったく同じものではないが共通する性格をもっており、画中詞というメディアが形を変えて継承されたものと考えてよいだろう。

第三章では第一章、第二章の内容を踏まえて、メディアとしての画中詞の考察を行った。ここで、画中詞を声の記録メディア、物語世界を多層化させるメディア、そして歴史資料からたどることはできない記憶のメディアとして評価した。

従来、画中詞と絵解きに関わりの深いものと考えられている。絵解き絵を口頭で説明するものだが、画中詞は絵の説明を文字として書き込んだものだからである。この絵解きの声を文字にしたのが画中詞であると考えれば、画中詞は声を記録して保存する記録メディアとすることができる。

また、画中詞は詞で語られる本筋とは異なる位相から物語を表現する。絵の中で語るのはいつも物語の中心人物ではなく周縁の人物たちである。むしろ詞の中には登場しない、画中にのみ存在する人物であることが多い。その人物たちによって語られるのは物語の中で起きた事件に対する批評であったり、あるいはまったく事件とは関係のない内容であったりする。こうした画中詞があることによって可能になるのは物語の相対化である。物語の事件を外から眺める人物が、その事件について批評をし、さらにその批評を読者が読むことで、物語だけでなく、それを読んだ読者自身の感情や思考までもが相対化されるのである。さらに、画中詞では登場人物が詞では語られない心情を吐露することがある。詞によって示される物語世界と画中詞によって示される物語世界が異なるものとなる時、物語の解釈は一つではなくなる。読者に多様な解釈を可能にするのも画中詞の機能であり、画中詞は物語世界を多層化させるメディアであるといえる。

物画中詞によって語るものたちは、いつも物語の周縁にいる人物たちである。なぜ、周縁の人物が語るのか。それは、物語の本筋を語るのはあくまで詞の役割であり、画中詞ではないからである。その結果、画中詞の作品内で声を発する者に女性が多くなったのは当然の帰結であった。本論で取り上げた作品のように、公家社会を舞台にした物語の場合、主人公たちの周縁で立ち働いているのは多くの女房たちである。そして、この女房たちに画中で語らせるために、多くの女房が画面に描かれた。『うたたね草子』絵巻は土佐光信の手になる彩色絵巻と、その絵を改作したと考えられる白描絵巻とがある。白描絵巻には画中詞が付されているのであるが、彩色絵巻との一番の違いは登場する女房の数である。白描絵巻は画中詞によって語らせるための女房が描き加えられているのである。画中の女房たちは創作された登場人物たちであるが、史料としてこれほど女性の声が集められたものはあるだろうか。物語はフィクションとはいえ、あまりにも現実から遠ければ読者の共感は得られない。画中の女房たちの発言が、読者の代弁でもあると考えれば、人物は創作と雖も、その発言には実

際の女性たちの思想や価値観が反映していると考えることができる。歴史史料からはなかなか拾い出すことのできない中世の女性たちの姿を、画中詞資料から知ることができるのである。画中詞は歴史の「記録」ではないが、中世を生きた女性たちの「記憶」ではある。画中詞はある時代、ある層の記憶媒体（メディア）でもあった。

第二部の各論では十五世紀から十六世紀の成立と考えられる『新蔵人』絵巻、『児今参り』絵巻、『住吉物語』、『うたたね草子』を取り上げ、それぞれの作品における画中詞について分析を行った。

第一章で取り上げた『新蔵人』絵巻は、詞と絵と画中詞という三つの媒体で一つの物語世界を作り上げた作品の好例であった。継時的にしか語ることのできない詞を補うように、画中詞でもって同時に物語世界を俯瞰させ、かつその世界を相対化させるという工夫がなされていた。『新蔵人』絵巻は主人公が男装して出仕するという奇抜な趣向を持ちながらも、詞と画中詞を効果的に用いて主人公の心情を丁寧に描き出し、そして多くの女性読者も共感できる女性の救済に関する問題を示した。この物語は画中詞という第三極のメディアがあったからこそ、ただの珍奇な物語に終わることなく、多様な解釈を内包する普遍的な物語になり得たと結論づけた。

第二章では『児今参り』について論じた。『児今参り』は画中詞を持つ彩色絵巻、白描小絵と、画中詞を持たない奈良絵本という三つの異なる形態を有する。比較すると、それぞれの形態に適した物語作りが工夫されていたことを明らかになった。特に、画中詞と小絵という形態の相性の良さは、この『児今参り』の例がよく示している。また、『児今参り』には三十名を超える女房が登場し、その多くに名前が付けられている。こうして画中の人物に名前をつけることで詞には登場しない複数のキャラクターを生み出し、そのキャラクターたちを画中で活躍させることで、物語世界に奥行きとリアリティが生まれた。『児今参り』は画中詞の名付けの機能が物語世界に与える影響をよく示していた。

第三章では画中詞を持つ横山本系『住吉物語』を取り上げた。『住吉物語』は物語の中でも類を見ないほど多くの本文系統を持つが、その背景にあったのは物語が書写される際に行われる改作であった。横山本系『住吉物語』における改作箇所を他本と比較した場合、主な改作箇所はすべて画中詞と関わるものであった。横山本系『住吉物語』は画中詞を新たに付すにあたって詞の改作が行われたと考えられるが、それは画中詞の創作が新たな物語の再創造を促す原動力ともなっていたことを示す。また、横山本系『住吉物語』は、『児今参り』や『うたたね草子』といった同時期に制作されたと考えられる物語同士の交流の後が見られた。画中詞を持つ作品は、物語を読むことと書くことが同時に行われる私的な場で作られたと考えられる。これらの物語に関わる筆者伝承を鑑みて、物語創作の背景には連歌を通じた、女性を含む知の連環があると推測される。

第四章は『うたたね草子』を取り上げた。『うたたね草子』の伝本には画中詞を持たない彩色絵巻と画中詞を持つ白描絵巻とがある。彩色絵巻である高松宮家本が絵所預の土佐光信によって、つまり公的な機関で作られていたのに対し、画中詞を持つ白描絵巻は飛鳥井栄

雅女一位局筆という伝承を有し、明らかに私的な場で作られていた点で対照的な伝本を持つ作品であった。それがゆえに画中詞というメディアの位相も明確に示された。白描絵巻は光信の絵をもとに改作を行っているが、改作によって描き出されたのは多くの女房たちである。そして、詞には登場しないこれらの女房たちがそれぞれに声を発し、物語世界を相対化させていった。また、白描絵巻にだけ付された最終段の絵に登場する児について、この児は『はにふの物語』の男主人公ではないかと指摘した。『放屁合戦絵巻』において『福富草紙』の高向秀武の娘が登場したように、画中詞という場は物語同士が交流できる場でもあったと考えている。それは画中詞が、物語を読むことと書くことが同時に行われる場で作られていると考えるからこそである。画中詞は物語で遊ぶことができる場所である可能性を、白描『うたたね草子』の最終段は示している。